

研究雑話(129)

障害児教育・動作学誌上実習(47)

藤井力夫

姿勢反射の発達とリズム運動の習熟(27)

まりつき動作の秘密、表・付点八分で「裏」を聞く。

前回は、1回旋2跳躍・なわとびのような足腰での4分の2拍子の習熟が、ノはーあノい◎ノにみるような「付点音符」の世界への移行と関係していることをお話ししました。次のような理由が考えられます。一つは、跳躍動作が歩行の速さに収束されるので、音価・四分音符が強められるということ。他は、4分の2拍子の反復それ自体が、リズム同期の基本単位となるということ。即ち、2小節＝「4足拍」でのまとまりです。これらは、歩行運動に起因するものですが、伸展性動作に導入することにより、足腰で記憶されるということでしょう。今回は、こうした子どもたちの手におけるまりつき動作、「付点八分」・調節の意義についてお話ししたいと思います。

スペクトル採譜図の開発：図は、「あんたがたどこさ」を歌いながらまりをついたときの手の位相、音声、

呼気流量、心電のポリグラフ。ゴムまり：直径約17cm。被験者：平均的な中学1年・男子。音声分析：スペクトル包絡で音高・パワーを表示。シグナルプロセッサ(NEC三栄、DP-1100)使用・ソフト開発。手の動き：上下変位をポテンションメータ(共和電業、DTP-2MDS)で記録。

「拍節」の「表」と「裏」：音声信号に対応して4分の2拍子・小節線を描出。例：ノあんた・がたノどこ・さ◎ノ。各拍節とも、下線部が「表」、他が「裏」。まりつき時が「表」で、戻り時が「裏」の関係。

「核音」+「付点」：拍節の「表」に特徴がみごとに集約。この歌の音階は「ミ」と「ラ」の4度で、その上に「シ」を付加した典型的な日本の民謡音階。まりつき時の音の高さは、この音階の「核音」、主核音・「ラ」と下核音・「ミ」。付加音・「シ」でつく箇所は、歌の山場にあ

たるノひごノのノひノで、主核音・「ラ」をさらに強調する関係です。戻り時の「裏」は、いずれも中間音・「ソ」で構成されています。

付点八分で「裏」を聞く：連続してまりをつくためには、2打拍の反復＝4突き、即ち、2小節分の安定が重要です。4突きの内容で持続が決まるということです。まりつき時の「表」の音価が「付点八分」で、戻り時の「裏」が「16分音符」。この関係が、戻りを予想したまりつきを保障しています。「前向き制御」が実現されています。「表・《付点八分》で《裏》を聞く」としました。

ゆっくりした「足拍」：本事例は毎分92回の速さ。ただただでなく、これを持続することは結構、困難。歩行でもその安定は、1回旋2跳躍なわとびの持続と対応しています。「裏」の予期にはこうした足腰が問われます。(北海道教育大学教授)

あんたがたどこさ (T.K, m, 13 yrs old.)

まりつき動作時の手の位相(スペクトル採譜図、藤井:1998)

